

ある。

第三章以下は本論ともいふべきであつて、「カモタケツツミの觀念」「八咫鳥」「葛木鳴との關係」「天神と地祇」「神の遍歴譚」「矢取神事と水口祭」「矢となれる父神」「若宮の降誕」「三井社」「鞍馬と猪頭」の都合十章から成つて居り、賀茂關係の重要な事項の逐一に就て著者はその所見を大膽に吐露し、最後の第十三章に於て全編の總括として、賀茂傳説の最も原始的な形を考へ、それが如何なる過程を経て風土記に見るが如きものにまで發展し來つたかを推論してゐるのである。この間に於ける著者の推論はかなり多岐に亘り、一々こゝに紹介論評する事は容易でない。

著者が我が古代文化の闡明に就て、従來人一倍の熱意を以てその蘊蓄を深めつゝあつた事は同學の等しく承認する所、而して本論文は過去久しきに亘るその造詣を傾けて作成せられた觀がある。實際著者は茲數年殆ど寧日なきまでに寒暑をいとはず、克明に田舎を巡歴し、口碑をたづね、傳承を究め、乏しき文獻的資料をあさり、専ら實地に就て研究の歩武を進める事につとめ、或は鎮守叢祠の祭禮に幾夜を徹して考察を盡した。古代文化研究の學徒としての著者の熱誠と努力とはまことに敬服に堪へぬものがある。本論文に於て著者が試みし果敢なる臆説や、斷案にはよし全幅的賛意を表し得ない多くな含んでゐるとはいへ、この眞摯なる學徒が全力を傾けて作成した本論文には所在その獨自の研鑽に基く新味の溢れた推論が記されて居

り、示唆に富んだ推考が爲されてゐる。前世紀以來考古學的的研究はその輝かしい業績によつて未知の古代社會に於ける物質文明を明かにした。今や民俗學的研究は考古學の尙よく充分なる成果を擧げ得なかつた古代社會の心に就ての考察にその機能を充たし始めてゐる。而して本論文は我が古代文化の心核に觸れんとして試みられた一試論として古代研究に關心を持つ大方人士の一顧すべき近頃の好著である。(四六倍版一六頁 定價一・一〇、發賣所丸善) (山根)

●京都帝國大學  
國史研究室藏 史料 集

京大國史研究室編

京都帝國大學國史研究室では早くより古文書室なる一室を設けてその蒐集に従事し學問研究に資すると共に史料の散佚を防いだ。この事は着手の期早きと地理の恵まれし點よりして約二十六年の間二萬餘點に及び、學界に著聞せる優秀なるもの夥しとしない。故三浦教授は本學で古文書學を講じこの蒐集に専心された爲め、早くより優れたるものを簡び刊行の志を有たれたが不幸災筮のために果さず、今その遺志を受けて完成されたものが本書である。

收むるところ五十五點、公武庶民の文書の形式を異にし内容に異なるものを集め、政治經濟より宗教藝能にまで及び、自建本建内記等の記録、畫像、器物をも含む。其等を六十七葉の玻璃版に印し外に目次一葉、及び解説一冊を附して、その實大寸

法、原文及び解説を載せるがそれは單なる字句の註釋に止らず、史的意義にまでも及ぶものである。印刷鮮明にして解説懇篤、美國に收められて、京大國史研究室の出版たるにふさはしい。(玻璃版菊四倍版六十七葉、解説四六倍版六十六頁、定價拾八圓、星野書店) (藤)

●滋賀縣史蹟調査報告 第五冊

本報告の執筆者肥後和男氏は嘗て専ら滋賀縣に於ける史蹟調査に従事し、同縣史蹟の最たる大津宮趾、紫香樂宮趾を闡明し、その結果を大津宮趾の研究及び紫香樂宮趾の研究なる二報告書として之を學界に送つたことがある。氏の史蹟調査に於ける態度ほかの二報告書に明かに見らる、如く、遺物の報告を出来るだけ精密ならしめんとすること、またその上に惜しみなく意見を開陳しようとするにある。故に氏の手による調査報告書は一面精しき報告であると同時に、一面常に一つの主張をもち、宛然一個の論文たる如き形をとらんとする。本報告書はまたこの氏の史蹟調査に於ける方向を氏の長ずる寺院遺蹟の調査に於て顯示せんとするのである。各項いづれも氏が専ら調査に當つて居た時に觸れられた結果を集めたものである。

本報告書の目次は、次の如くである。

崇福寺に關する延暦僧錄の記事

錦織平尾山に於ける平安時代の墳墓

石山町近江國分寺

瀬田諸廢寺趾  
石居廢寺趾  
飯道山(飯道寺趾)

勝樂寺

京極氏歷代墳墓

北畠具行卿の墓

各項共に報告たる性質に於てみるべきものあるは云ふまでもないが、この内特に注意すべきは、延暦僧錄の記事、飯道山、京極氏墳墓の三條項であらう。即ち延暦僧錄の記事に於ては崇福寺に關する問題が取り上げられ、日本高僧傳要文抄の延暦僧錄第二の文を紹介し、論ずるところは之が延暦の故文の抄略であり、從つて崇福寺の緣起の最古のものとすべきであり、之によつて崇福寺創立當時の伽藍配置を知り得るといふのである。而して所謂崇福寺當初の伽藍配置とは金堂(彌勒堂)の東には講堂があり、金堂の南方には欄あつて、こゝに二行の橋廊を架しそれを渡つて南方に殿が相對してゐたのである。この配置を著者は、著者の嘗て以て崇福寺遺趾と比定した滋賀山中の礎石配置に吻合するものとし、之によつて著者の大津宮趾の研究正續二篇に於て公けにした意見か更に補ひ且つ強めようとする。

本項の如きは嘗て著者によつて學界に投げられた大津宮趾の問題が大きかつただけに、單に一報告と見過さるべきでない。

飯道山の項に於ては、飯道寺遺趾の報告があることは特に云ふまでもないとしても、注意すべきは飯道山にまつばる傳説の